

幼児期における他者感情の推測能力の発達

——利用情報の変化——

朝 生 あけみ*

DEVELOPMENT OF ABILITY TO INFER OTHER'S EMOTIONS IN PRESCHOOL CHILDREN

Akemi ASOU

The purpose of this study was to examine the ability of pre-school children (four to six year-olds) to infer emotions. Subjects were presented a short story and information on a hero's behavior (character), and then were asked to infer the hero's emotions. The result of a series of three experiments showed that younger children tended to infer the hero's emotions using only the situational information, while older children could infer the hero's emotions using not only situational information but also information on the hero's behavior (character) or the knowledge of social categories.

Key words: pre-school children, infer emotions, situational information, information on hero's behavior (character), knowledge of social categories.

問 題

人が社会の中でより良い生活を送るためには、他者がどのような立場におかれ、どのような状態や気持ちであるかを知り、それに基づいて適切な行動が取れることが重要である。

本研究では、他者に対して適切な行動を取るための前提条件と考えられる他者の感情を推測する能力の発達について検討する。

他者の感情を推測する能力を扱った研究は、幼児の自己中心性の検討という文脈で、Borke (1971), Deutsch (1974), Chandler & Greenspan (1972) など幾つかの研究がある。これまでの研究では、4歳頃になると、日常場面での種々の状況におかれた他者の感情を推測できるようになることが明らかである。しかし、これらの研究では、幼児が自己中心的であるか否かという二分法的な見方で研究が進められており、幼児がどのような方法で他者感情を推測し、その推測方法がどのように変化していくかについては明らかにしていない。また、人は、同

一場面でも必ずしも同じ感情を抱くとは限らず、それはそれぞれの人の持つ特性や過去の経験などによって異なると思われるが、これまでの研究では、自他のおかれていた状況の違いにのみ焦点をあてており、自他の特性が異なる場合の他者感情の推測についてはほとんど検討していない。

その中で、Gnepp, Klayman & Trabasso (1982) は、他者感情を推測する際に使用される情報源について調べており、これまでの研究方向とは異なった観点を示している点で重要である。

Gnepp らは、他者感情を推測する際に使用される情報源として、S: 状況情報、N: 他者の属する集団の一般的行動傾向についての情報、P: 特定他者の特性についての情報を想定した。就学前児(3~5歳)、6~7歳、大学生で調べた結果、適切な反応は年齢と共に増加するが、すべての年齢群でS情報よりもN情報を、N情報よりもP情報を好んで使用し、この点において年齢差はみられないと報告している。そして、他者感情の推測能力の発達の差は、質的というよりもむしろ量的なものであると述べている。しかし、呈示された場面での被験者自身の感情が不明確であり、被験者がN情報やP情報を

* 公文教育研究所 (Kumon Institute for Educational Research)

本当に利用したかどうか疑問が残る。さらに、推測理由を聞いていないので、推測に至った過程が不明確である。これらの問題点を残したまま Gnepp らの研究から直ちに他者感情の推測能力の発達の差は、質的というよりもむしろ量的なものであると結論を下すのは早急すぎる。

本研究では、実験Ⅰ、Ⅱでこれらの問題点を補い、幼児の他者感情の推測能力の発達の変化を検討する。

また、Gnepp らの研究では、他者感情を推測する際に利用する情報として、外から新たに呈示される情報のみを扱っているが、人が他者感情を推測する際に利用する情報はそれだけであろうか。

Higgins (1980, 1981) は、他者についての判断において社会的カテゴリ知識（「大人だから～が好きであろう」というような年齢、姓などのカテゴリ知識）が使用されるのではないかと述べている。さらに、木下 (1985) は、他者の好みの推測において社会的カテゴリ知識が利用されることを実証的に示している。

これらの研究は、直接、他者感情の推測を扱っていないが対象となる他者の属する社会的カテゴリについての既有知識が他者感情の推測に利用されることを示唆している。実験Ⅲでは、この点について検討する。さらに、社会的カテゴリ知識が利用されるとすれば、この既有知識は、新たに外から与えられる情報とどのように影響しあうのかという点もあわせて検討する。

以上、本研究では実験Ⅰ、Ⅱ、Ⅲによって、幼児が他者感情を推測する際にどのような情報をどのように利用するのか、さらに、幼児期を通して情報利用の方法（推測方法）がどのように変化するかを明らかにする。

実 験 Ⅰ

目 的

幼児が、主人公のおかれている状況情報と自己とは異なる特性を持つ主人公の行動（特性）情報を与えられた場合、主人公の感情を推測する際にどの情報を利用する

か、さらに、その利用方法は加齢とともにどのように変化するかを明らかにする。

推測方法として2つの型を想定した。第1の型は、主人公の行動情報は利用せず状況情報のみを利用して主人公の感情を推測するもの。これは、自分がその状況にいたらどういう気持ちになるかを考え、それをそのまま他者の気持ちと見なすものであり、自己を準拠点としての推測と言える。この方法を本実験では、自己準拠型の推測方法とする。第2の型は、状況情報と主人公の行動（特性）情報の両方を利用して感情を推測するもの。これは、状況だけでなく他者の特性をも考慮にいれての推測であり、この方法を本実験では、他者準拠型の推測方法とする。

自己準拠型の推測は、自己の感情をそのまま主人公の感情とするもので自己の感情を統制する必要はない。一方、他者準拠型の推測では、状況と他者の特性の両方を考慮にいれなければならない。かつ、自己と他者が異なる特性を持つ場合には自己の感情を統制することが必要である。以上より、自己準拠型の推測よりも他者準拠型の推測のほうが難しいと考えられる。従って、年齢が上がるにつれて、自己準拠型から他者準拠型の推測方法へと変化していくであろうと予測できる。

上記の点について、被験児と異なる特性を持つ主人公の感情を推測する課題を設定して検討する。

方 法

被験児 幼稚園および保育園の年少児（平均年齢4;1, レンジ3;7～4;6）、年中児（平均年齢5;0, レンジ4;7～5;6）、年長児（平均年齢6;1, レンジ5;7～6;6）、各30名（男女各15名）。

材料 嬉しい気持ち、悲しい気持ち、怒っている気持ち、普通の気持ちの4種類の表情図。主人公の行動情報を呈示しない課題として使用する例話2つ、行動情報を呈示する課題として使用する例話4つと行動情報（TABLE 1）およびその内容を示す図版（FIG. 1）。なお、表情図および主人公の性は、被験児と一致するようにした。

手続 主人公の行動情報と例話をその内容を示す図版とともに呈示して、主人公はどんな気持ちであるか、どんな表情になるか（表情図選択）、そういう気持ちになったのはどうしてかなどについて質問する（具体的な質問形式をTABLE 2に示す）。その際、主人公の行動情報は、被

TABLE 1 刺激材料

課 題	行 動 情 報	例 話	使用実験
		A プレゼントをもらう	I・II
		B 玩具が壊れる	I・II・III
カブト虫課題C	{ CO+ カブト虫を集めている } { CO- カブト虫を見ると逃げる }	C カブト虫を貰える	I・III
カブト虫課題C'		C' カブト虫を貰えなくなる	I
砂遊び課題D	{ DO+ 砂遊びをいつもしている } { DO- 砂遊びが始まると家に帰る }	D 砂遊びをする	I・II
砂遊び課題D'		D' 砂遊びができなくなる	I
テレビ課題E	{ EO+ マンガをいつも見ている } { EO- マンガは見ない }	E パーマンがテレビに映る	III

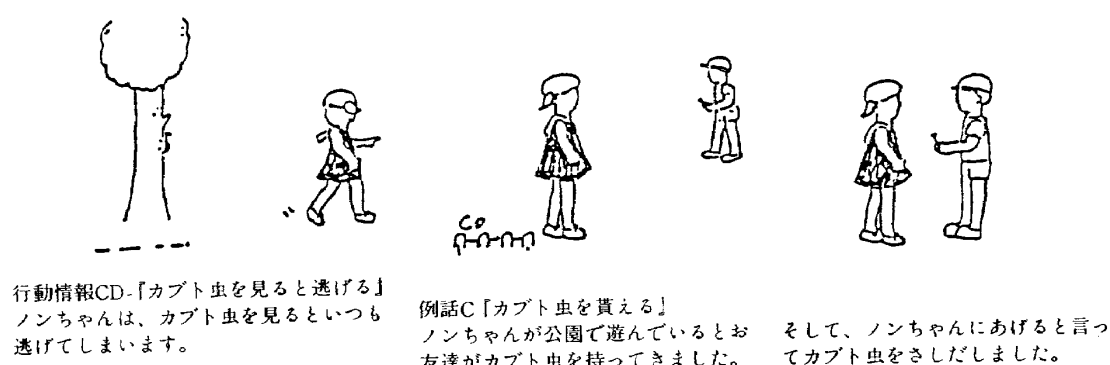


FIG. 1 刺激材料の具体例（カブト虫の好きな女兒用）

TABLE 2 質 問

番号	内 容
1	〇〇ちゃんは、どんな気持だと思いますか（主人公の感情推測、言語報告）
2	〇〇ちゃんは、どんなお顔になりますか（主人公の感情推測、表情図選択）
3	〇〇ちゃんは、どうして□□気持になったんだと思いますか（主人公の感情推測の理由）
4	〇〇ちゃんは、カブト虫（お砂遊び）が好きだと思いますか、嫌いだと思いますか（主人公の特性推測）
5	〇〇ちゃんは、お砂遊びが始まるといつもどうするんですか（主人公の行動情報の確認）
6	どうして〇〇ちゃんは、お砂遊びが始まるとすぐ家に帰ってしまうのだと思いますか（主人公の特性推測）
7	お砂遊びの嫌いな〇〇ちゃんが、お砂遊びをすることになったとき、どんな気持だと思いますか（主人公の感情推測）

験児の気持とは異なると想定したものを呈示する。

実験順序は、①表情図の確認をする。②被験児を主人公として、例話C『カブト虫を貰える』と例話D『砂遊びをする』を提示し、被験児がどういう気持であるかを聞く。ここでの反応によって、後に呈示する行動情報を決定する。③主人公の行動情報を呈示しない課題：例話A『プレゼントをもらう』または例話B『おもちゃが壊れる』を提示し、質問1、2を行う。④主人公の行動情報を呈示する課題：カブト虫課題C（FIG. 1）を提示し、質問1～4を行う。次いで、砂遊び課題D'を提示し、質問1～4を行う。⑤主人公の行動情報を呈示しない課題：例話AまたはBを提示し、質問1、2を行う。⑥主人公の行動情報を呈示する課題：砂遊び課題Dを提示し、質問1～4を行う。次いで、カブト虫課題C'を提示し、質問1～4を行う。

行動情報を呈示しない課題を設けたのは、この課題が従来使用されているもので比較的易しい課題であると考えられるので、被験児の気持を和らげたり、類似課題への飽きを防ぐためである。

実験は、すべて筆者により個別的に被験児の所属施設の1室で行い、子どもの反応や発話は、一定の形式で筆記するとともにテープレコーダーに録音した。

結果と考察

主人公の行動情報を提示する課題における反応を、言語報告と選択された表情図を基に3つに分類した。自己準拠反応：主人公の気持を自分と同じであると推測したもの。他者準拠反応：主人公の行動情報から、主人公の特性を正しく推測し、それを基にして感情を推測したもの。推測不能：普通の気持の表情図を選択し、さらに、言語報告も選択理由もないもの。ランダムに選んだ30名のデータを2人の評定者が独立に評定したところ、分類の一致率は、全例話90%以上であった。

① 個々の反応

各例話ごとに他者準拠反応をした場合に1点を与え、個人別に合計得点（0～4点）をだした。平均得点（SD）は、年少児 0.6（1.0）、年中児 0.9（1.3）、年長児 2.7（1.5）であった。分散分析の結果、年齢の主効果が有意であった（ $F(2.87)=27.24, p<.01$ ）。さらに、Newman-Keuls法により対間比較を行った結果、年中、年長児間において1%水準で有意差が得られた。

年少、年中児では、他者準拠反応が少なく両年齢群間に差がほとんどみられない。これに対して、年長児になると著しく他者準拠反応が増加し、年中、年長児間に他者感情の推測方法の発達の変化がみられる。

② 個人内の反応パターン

4例話全てに、自己準拠反応をした者を自己準拠型、

他者準拠反応をした者を他者準拠型、両反応を含む者を混合型とした。各型の人数を TABLE 3 に示す。

TABLE 3 反応パターン別人数 () 内は%

	年少	年中	年長
自己準拠型	20 (67)	19 (63)	4 (13)
混合型	9 (30)	9 (30)	13 (43)
他者準拠型	1 (3)	2 (7)	13 (43)

年齢×反応パターンの χ^2 検定は、有意であった($\chi^2=28.88$, $df=4$, $p<.001$)。

年少、年中児では、自己準拠型が中心で、両年齢群間に差がほとんどみられない。これに対して、年長児では、混合型と他者準拠型が中心となる。つまり、反応パターンによる分析においても、年中児と年長児の間に発達的な変化がみられる。

③ 推測理由

感情の推測理由を6つに分類した結果を FIG. 2 に示す。

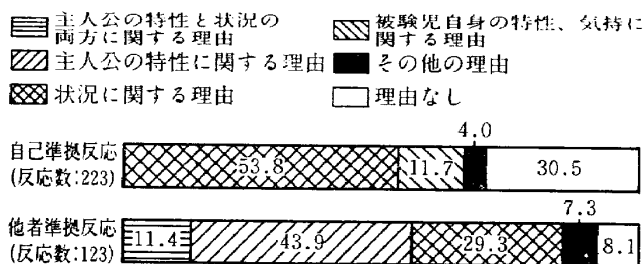


FIG. 2 自己準拠反応と他者準拠反応の推測理由の割合(%)

なお、ランダムに選んだ30名のデータを2人の評定者が独立に評定したところ、分類の一致率は、91%であった。

自己準拠反応をした場合は、状況に関する理由(カブト虫くれたから)をあげている者が多い。また、被験児自身の気持(カブト虫、欲しいから)を理由としている者もいる。

他者準拠反応をした場合は、主人公の特性について(カブト虫、嫌いだから)の理由を述べている者が多い。これは、主人公の行動情報から主人公の特性を推測し、それを基に主人公の感情を推測していることを示している。また、他者準拠反応にもかかわらず、状況のみを理由としてあげている者に対してさらに質問すると、ほとんどの者(36人中34人)が主人公の行動や特性について言及することができる。

つまり、自己準拠反応を示す者は、状況情報によって主人公の感情を推測し、一方、他者準拠反応を示す者は、状況情報と主人公の行動情報によって主人公の感情を推測していることがわかる。

以上の結果から、4～5歳児では、状況情報のみを利用して、つまり、他者の特性は考慮にいれず他者のおかれている状況から感情を推測するものが多く、6歳児になると、主人公の行動情報と状況情報の両情報を利用して、他者の特性を考慮に入れて感情を推測する者が増えると考えられる。これらより、他者感情の推測能力において、加齢に伴って、利用する情報が変化するという質的な発達的な変化があると考えられる。

この結果は、Gnepp ら(1982)の就学前児でも主人公の特性を考慮して感情を推測し、他者感情の推測能力の発達的な変化は質的というよりもむしろ量的なものであるとの結論とくい違うものである。なぜ、このような違いがみられるのか。それには2つの要因が考えられる。

第1には、Gnepp らの研究では、被験者自身の反応を測定しておらず、主人公と被験者の特性が異なるかどうか不確かである。そのため、主人公と被験者の特性が等しかった場合に、主人公の特性を考慮したと過大評価された可能性があるのではないかと考えられる。

第2には、彼等は被験者の年齢段階を3～5歳、6～7歳、大学生と大きく3段階にとっているもので、細かな変化を見いだすことができなかったのではないかと考えられる。

実験Ⅰの課題で他者準拠反応をするためには、主人公の感情を推測する時点で、主人公の特性の正しい理解と保持が必要である。自己準拠反応をした被験児は、主人公の特性を十分に理解していなかったか、あるいは、理解していてもそれを保持していなかったのかもしれない。そこで、この点を明らかにするために実験Ⅱを行う。

実験Ⅱ

目的

自己準拠反応を示す被験児に対して、主人公の特性を正しく理解させた上で主人公の感情を推測させる実験群と、このような手続をふまない統制群との比較により、自己準拠反応になってしまう原因が、主人公の特性の正しい理解と保持の欠如であるか否かを明らかにする。

方法

被験児 実験群：幼稚園年中児(平均年齢5;3, レンジ4;9～5;8), 18名(男女各9名)。統制群：幼稚園年中児(平均年齢5;3, レンジ4;10～5;7), 14名(男女各7名)。

材料 実験Ⅰで使用した表情図。例話A, B, 砂遊び課題D(行動情報DO- 例話D)とそれらの内容を示す図版(TABLE 1)。

手続 ①表情図の確認をする。②被験児を主人公として、例話Dを呈示し、被験児自身の気持を聞く。なお、

全員が『嬉しい気持』を示す反応であった。③砂遊び課題Dを提示し、質問1～4 (TABLE 2)を行う。ここの反応で、主人公の特性を正しく理解しておらず自己準拠反応を示す者を、本実験の被験児とした。実際には、45名中32名*が対象児となり、彼等をランダムに前述のように2群に分けた。④行動情報を呈示しない課題：例話AまたはBを提示し、質問1～3**を行う。⑤行動情報を呈示する課題：砂遊び課題Dを提示し、質問1～4および7を行う。なお、実験群のみ、行動情報DO-『砂遊びが始まると家に帰る』を呈示した直後に質問5, 6, 4*** (TABLE 2)を順に行い、主人公の特性への注意を促した。

結果と考察

実験Iと同様に、例話D (手続⑥)での被験児の反応を、自己準拠反応と他者準拠反応に分類した。また、自己準拠反応を行った者については、質問4での反応を基に、保持タイプ (主人公の特性の正しい理解を持保している) と非保持タイプ (主人公の特性を保持していない) に分けた。結果を FIG. 3 に示す。

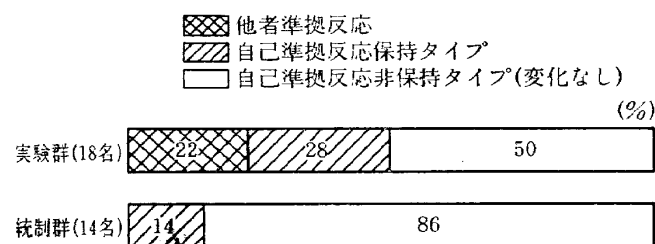


FIG. 3 実験群・統制群の反応の割合

TABLE 4 実験群 (男児5才0か月)
(主人公はひろし君)

質 問	反 応
行動情報DO-	
5 ひろし君は、お砂遊びが始まるといつもどうするんですか	帰りたいと思う
6 どうして帰りたいと思うのですか	ひろし、お砂遊びが大嫌いだから
例話D	
1 ひろし君は、どんな気持だと思えますか	いい気持だと思う
2 どんなお顔になりますか	(嬉しい気持の表情図をさす)
3 どうして、ひろし君はいい気持になったんですか	お砂遊びが大好きだから
5 ひろし君は、お砂遊びが始まるとどうするんですか	かえっちゃった
6 どうして帰っちゃったんだと思えますか	お砂遊びが大嫌いだから
7 お砂遊びの嫌いなひろし君が、お砂遊びをすることになったとき、どんな気持だと思えますか	いい気持

* 45名中13名は、他者準拠反応を示したので、本実験の対象から除いた。

** *** 質問は、子どもの反応に応じて、言い方をかえたり質問をはぶくこともあった。

他者準拠反応に変化したものは、実験群で18名中わずか4名にすぎず、また、統制群では一人もいなかった。

自己準拠反応についてのみ、群 (実験群, 統制群) × 保持タイプ (保持, 非保持) の χ^2 検定を行った結果、有意であった ($\chi^2=4.45$, $df=1$, $p<.05$)。

このことから、質問5, 6, 4によって行動情報を強調することで、主人公の特性を正しく推測、理解させ、それを保持させることに効果があったといえる。しかし、これが、主人公の感情推測に利用されることは少なかった。

また、自己準拠反応を示したもの (両群併せて22名) に対して、直接、主人公の特性を言及して感情の推測を求めても (質問7) 相変わらず『いい気持』と答えた者が18名 (82%) いた。具体例を TABLE 4 に示す。『わかんない』と答えたものは3名で、『嫌な気持』と訂正した者は1名のみであった。

以上より、たとえ主人公の特性の正しい理解と保持ができていても、それを利用せずに自己準拠反応をする者がいることがわかる。つまり、主人公の特性の正しい理解と保持が、直接、主人公の特性を利用しての感情の推測に結びつくわけではないと考えられる。

それでは、どのような要因が自己準拠反応と関連しているのか。

ある被験児は、主人公が砂遊びが嫌いであることを理解しながらも、主人公の気持を『いい気持』と推測し、

その理由として『(主人公は) やな気持だけど、砂遊びやりたいと思うから』と答えている。これは、自己の感情統制の欠如によると考えられる。

また、その他の要因として、同一場面でも人は必ずしも同じ感情を抱くとは限らないことの認識の欠如等が考えられる。

実験 III

目 的

実験Iによって、他者感情を推測する際、主人公のおかれている状況情報と行動情報が利用されることが明らかとなった。しかし、これらの情報以外にも、他者感情の推測に利用されるものとして社会的カテゴリ知識が考えられる。実験IIIでは、幼児が社会的カテゴリ知識を利用して他者感情を推

測するか否か、もし、利用するとすれば、それは、新たに外から与えられる情報とどのように影響しあうのかという点について検討する。

具体的には、種々の社会的カテゴリに属する主人公を設け、主人公の行動情報を与えない場合に、幼児が社会的カテゴリを利用して感情を推測するか否か、また、被験児の社会的カテゴリに関する既有知識と矛盾する主人公の行動情報を呈示した場合に、どちらの情報を利用するか、さらに、その利用方法は年齢とともにどのように変化するかを明らかにする。

方 法

被験児 幼稚園および保育園の年少児（平均年齢 4; 0, レンジ 3; 8~4; 5）、年中児（平均年齢 4; 11, レンジ 4; 6~5; 5）、年長児（平均年齢 6; 0, レンジ 5; 6~6; 4）。各28名（男女各14名）。

材料 表情図 4 枚。例話 C, E と各例話の主人公の行動情報（TABLE 1）およびその内容を示す図版。主人公として、社会的カテゴリが異なる乳児、同年齢男児、同年齢女児、成人男性、成人女性の 5 種を設けた。

手続 実験 I とほぼ同じである。

被験児を各年齢ごとにランダムに a, b 群に分けた。a 群には、カブト虫課題 C で同年齢同性、成人異性、テレビ課題 E で同年齢異性、成人同性の主人公を与え、b 群には、カブト虫課題で同年齢異性、成人同性、テレビ課題 E で同年齢同性、成人異性の主人公を与えた。乳児の主人公は、両課題が各群内で同数になるようにした。

実験順序は、①表情図の確認をする。②例話 C および E を被験児を主人公として呈示し、被験児自身の気持を聞く。③例話 B を呈示し、質問 1~3 を行う。④カブト虫課題およびテレビ課題を主人公の行動情報を与えずに呈示し、それぞれ質問 1~3 を行う。⑤カブト虫課題およびテレビ課題をそれぞれの主人公の行動情報を与えて呈示し、質問 1~3 を行う。なお、主人公の行動情報は、④での被験児が推測した感情とは矛盾する感情を示すであろうと想定したものを与えた。

実験順序④、⑤での例話呈示順は、ランダムである。

TABLE 5 実験Ⅲにおける反応分類基準

	行動情報を呈示しない課題	行動情報を呈示する課題
A	状況情報を利用して推測する	状況情報を利用して推測する
B	社会的カテゴリに関する既有知識を利用して推測する	社会的カテゴリに関する既有知識を利用して推測する
C	状況情報や社会的カテゴリに関する既有知識を利用して推測する	推測できない
D	推測できない	行動情報を利用して推測する
E	状況情報を利用して推測する	行動情報を利用して推測する
F	社会的カテゴリに関する既有知識を利用して推測する	行動情報を利用して推測する
分類不能	上記分類に入らないもの	

TABLE 6 カテゴリー別反応数

	カブト虫課題			テレビ課題		
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児
A	49	15	6	48	23	10
B	2	3	1	5	1	1
C	7	4	4	3	4	4
D	1	4	3	2	2	3
E	9	31	43	4	31	35
F	2	12	13	5	7	17
分類不能	0	1	0	3	2	0

結果と考察

行動情報を呈示しない場合と呈示した場合での反応を対比して、各反応を TABLE 5 のように分類した。

なお、ランダムに選んだ15名のデータを2人の評定者が独立に評定したところ、一致率は91%であった。

反応を各カテゴリ別に分類した結果を TABLE 6 に示す。

A 反応は、行動情報の有無にかかわらず状況情報のみを利用して他者感情を推測するものであるから、自己とは異なる特性をもつ他者という点についての配慮が欠けている反応と考えられる。B, C, D 反応は、自己とは異なる特性をもつ他者という点についての配慮はあるが、適切な感情推測には至っていない段階にある反応と考えられる。E 反応は、状況情報と他者の行動情報を効果的に利用して感情を推測している反応と考えられる。F 反応は、主人公の行動情報が与えられなければ、その主人公の社会的カテゴリ知識を利用して推測し、特定他者としての主人公の行動情報を呈示されれば、それを利用して感情を推測しているものであるから、E 反応よりもさらに進んだ反応であると考えられる。以上のように各反応をとらえ、年齢×反応カテゴリ (A, B+C+D, E, F) で χ^2 検定を行った結果、テレビ課題の主人公が乳児・女児の場合を除いて、すべて有意であった (カブト虫課題・乳児 $\chi^2=14.80$, 女児 $\chi^2=24.92$, 男児 $\chi^2=22.44$, 成人女性 $\chi^2=19.15$, 成人男性 $\chi^2=14.90$, テレビ課題・男児 $\chi^2=17.82$, 成人女性 $\chi^2=24.62$, 成人男性 $\chi^2=19.62$, $df=6$, $p<0.05$)。

両課題とも、年少児では、A 反応が中心である。年中児になると、A 反応が減少し、E, F 反応が増加してくる。さらに、年長児になるとこの傾向が一層強くなる。

これらより、年少児では、主人公の特性は考慮に入れず、状況情報のみを利用して感情を推測する者が多いと考えられる。年中児になると、主人公の行動情報から特性

TABLE 7 B・C反応の具体例（カブト虫課題，主人公：同年齢男児）

		質 問	反 応
B 反 応	行動情報なし	ひろし君は，どんな気持だと思いますか どんなお顔になりますか どうして，ひろし君は，嬉しい気持になったんだと思いますか	嬉しい (嬉しい気持の表情図をさす) 男の子はね，カブト虫もてるから
	行動情報 CO-	ひろし君は，どんな気持だと思いますか ひろし君は，どんな気持だと思いますか	男の子は，カブト虫つかまえられる， つかまえられる 嬉しい
C 反 応	行動情報なし	ひろし君は，どんな気持だと思いますか どんなお顔になりますか どうして，ひろし君は，嬉しい気持になったんですか	嬉しい気持 (嬉しい気持の表情図をさす) 男というのはさ，カブト虫とか，虫とか好き
	行動情報 CO-	ひろし君は，どんな気持だと思いますか どうして，わかんなくなっちゃったの	嬉しいか，やだかわかんない だって，男はカブト虫とか大好き，それが，逃げ出そうと思ったらわかんないんだよ

この反応もB反応と同様に既有知識がマイナスの働きをしているものと考えられる。全体にこの反応も少ないが，どの年齢群にもみられ，既有知識と新しい情報との矛盾による葛藤を示しているものが各年齢群にいとと考えられる。

これらの結果より，子どもたちは自分の持っている知識と新しい知識との矛盾に会い，自分の知識を変更できず他方を無視してしま

を推測し，それを利用して感情を推測する者が多くなるとともに，主人公の行動情報がない場合には，自発的にその主人公の社会的カテゴリに関する既有知識を利用して推測する者が増える。そして，年長児になるとこの傾向が一層強くなると考えられる。

B反応は，具体例（TABLE 7）のように，自己と他者の違いには気づきながらも，既有知識に縛られ，新しい情報を利用できず誤った推測をしている反応と考えられる。つまり，既有知識が正しい推測を妨げていると考えられる。この反応は全体的に少数であるが，特に年長児では稀である。

一方，F反応は，特定他者としての主人公の行動情報がなければ，自発的に主人公の社会的カテゴリに関する既有知識を利用して感情を推測し，行動情報が呈示されれば，それが被験児の持つ主人公の社会的カテゴリに関する知識と矛盾するものであっても，行動情報を利用して感情を推測するものである。これは，既有知識が正しい感情推測に対して効果的な働きを持っていると考えられる。この反応は，加齢とともに増加している。

B，F反応の結果から，年少であるほど社会的カテゴリに関する既有知識の利用が少なく，しかも，利用する場合には，その既有知識への固執が強い。そして，年長になるにつれて，社会的カテゴリに関する既有知識の利用も増え，かつ，その既有知識に対して柔軟になり，選択的に利用できるようになると考えられる。

C反応は，具体例（TABLE 7）のように，社会的カテゴリに関する既有知識と新しい情報との矛盾にあい推測ができなくなってしまう反応と考えられる。つまり，

う状態から，うまく両者を調整できないままである状態へ，そして，新しい情報を受け入れることができる状態へと発達していくのではないかと考えられる。

D反応は，行動情報を利用して主人公の感情を推測できるが，行動情報がないと推測できないものである。状況情報や社会的カテゴリを利用しての他者感情の推測の根底には，人間の共通特性の想定があると考えられる。D反応は，特定他者の情報がなければ他者感情を推測できないのであるから，これは，人間の共通特性の想定が欠けているための反応であると考えられる。このような反応と類似の反応が，Selman (1971) の Perceptual-Taking 課題においても見られている。本実験においても，また，Selman の実験においても，このような反応は少数であるが，これらの反応の出現は，自他の区別にのみ目が向いて，人間の共通特性を想定しての他者についての推測ができない時期があることを示唆していると考えられる。

全体的考察

実験Ⅰ，Ⅱ，Ⅲにより，①加齢とともに，状況情報のみを利用しての感情推測から状況情報と他者の行動（特性）情報の両方を利用しての感情推測へと発達すること，②他者の行動情報の利用は，他者の特性の正しい理解と保持のみによって可能になるわけではないこと，③他者感情の推測には，外から与えられる情報だけでなく，社会的カテゴリに関する既有知識が利用され，年長ほどその利用が多く，かつ，効果的にそれを利用できるようになることが見いだされた。つまり，幼児であっても状況

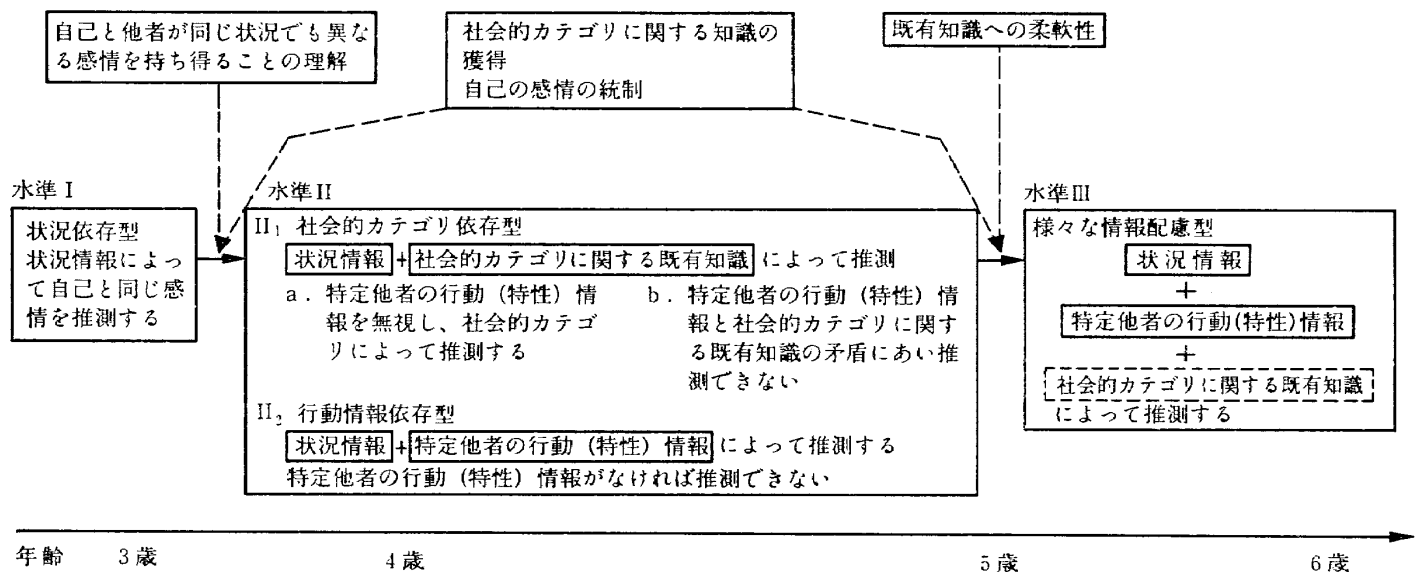


FIG. 4 幼児期における他者感情の推測方法の発達の变化

情報などを使って他者感情を推測できるし、幼児後期になれば他者の特性や社会的カテゴリを利用して他者感情を推測できるようになることが明らかとなった。

3つの実験結果を基に、幼児期における他者感情の推測方法がどのように発達するかについての図式化を試みたのが FIG. 4 である。

大きな流れとして、水Ⅰ(状況依存型)から水Ⅲ(様々な情報配慮型)が考えられる。水Ⅲにおける点線は、特定他者の行動(特性)情報がなければ社会的カテゴリに関する既有知識を利用して推測することを示している。

水ⅠとⅢの中間に、水Ⅱが想定できる。水Ⅱはさらに2つに分かれ、II₁(社会的カテゴリ依存型)とII₂(行動情報依存型)が考えられる。

水ⅠからⅡへの移行をもたらす要因として自己と他者が同じ状況でも異なる感情を持ち得ることの理解、および、社会的カテゴリに関する知識の獲得、自己の感情統制が、水ⅡからⅢへの移行をもたらす要因として上記の2つの要因と既有知識への柔軟性が本研究から示唆される。しかし、これらの要因については、今後の研究による解明が必要である。

引用文献

- Borke, H. 1971 Interpersonal perception of young children; Egocentrism or empathy? *Developmental Psychology*, 5, 263—269.
- Chandler, M.J. & Greenspan, S. 1972 Ersatz egocentrism; A reply to H. Borke. *Developmental Psychology*, 7, 104—106.

Deutsch, F. 1974 Female preschooler's of affective responses and interpersonal behavior in videotaped episodes. *Developmental Psychology*, 10, 733—740.

Gnepp, J., Klayman, J. & Trabasso, T. 1982 A hierarchy of information sources for inferring emotional reactions. *Journal of Experimental Child Psychology*, 33, 111—123.

Higgins, E.T. 1980 Accuracy and differentiation in social prediction; A developmental perspective. *Journal of Personality*, 48, 4, 520—540.

Higgins, E.T. 1981 Role taking and social judgment; Alternative developmental perspectives and processes. In Flavell, J. H., Ross, L (Eds.) *Social cognitive development. Frontiers and possible futures*. Cambridge university press, 119—153.

木下芳子 1985 他者の好みの推測における社会的カテゴリの使用 埼玉大学紀要 34, 17—26.

Selman, R.L. 1971 Taking another's perspective; Role-taking development in early childhood. *Child Development*, 42, 1721—1734.

付 記

本論文の作成にあたり、ご指導頂きました東京学芸大学 高橋道子助教授、埼玉大学 木下芳子助教授に深く感謝致します。

調査に際しご協力頂きました、葛飾みどり幼稚園、葛飾新宿幼稚園、江戸川区立北小岩保育園、北小岩みどり保育園の皆様に深く感謝致します。

(1986年7月29日受稿)